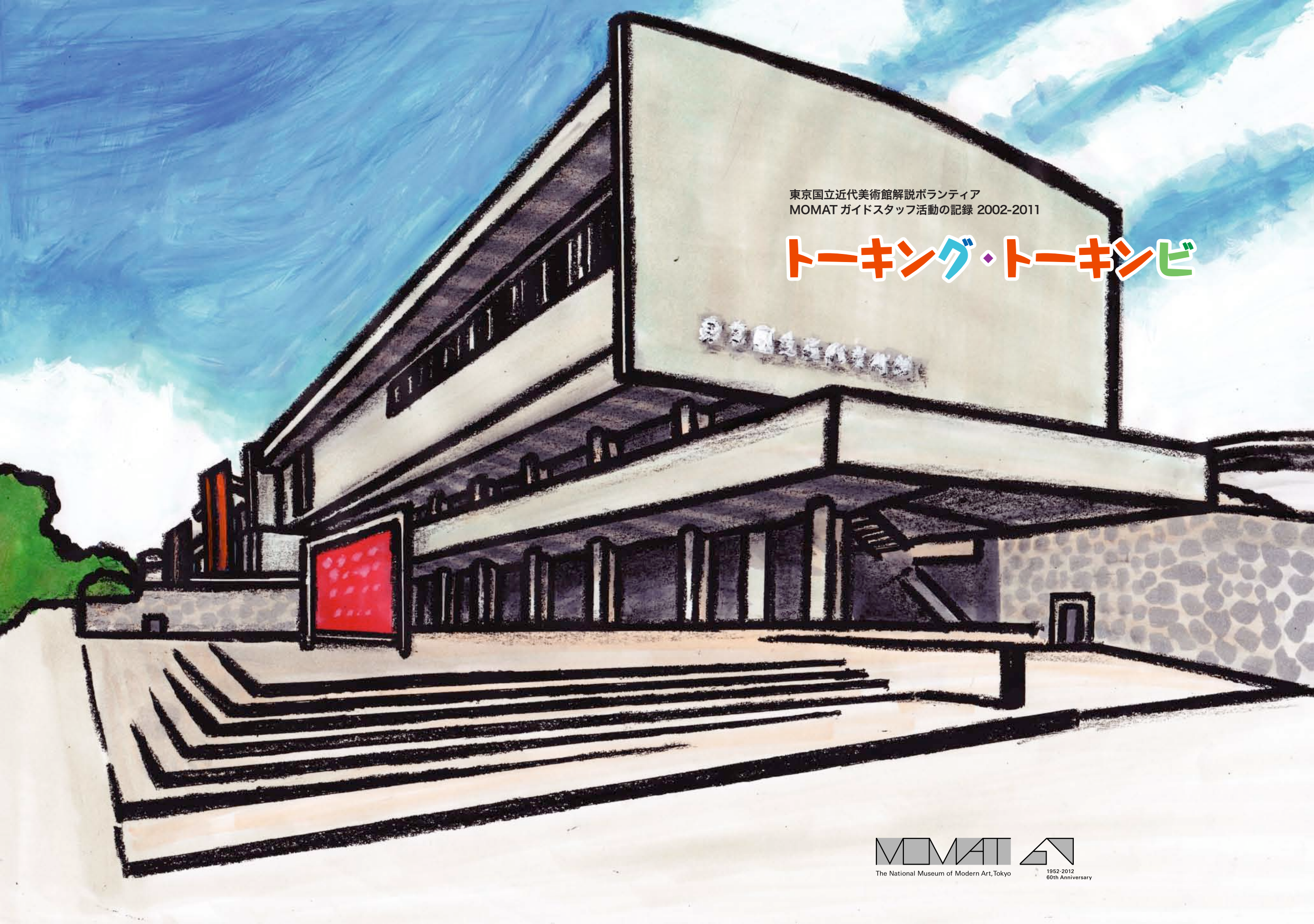




東京国立近代美術館解説ボランティア  
MOMAT ガイドスタッフ活動の記録 2002-2011

# トーキング・トーキンビ



目次

2-3  
ガイドスタッフができるまで

4-5  
活動内容

6-7  
ガイドスタッフルーム大公開

8-10  
所蔵品ガイド

11  
ハイライトツアー

12-15  
スクールプログラム

16-18  
ガイドスタッフのひとこと

19-20  
座談：大人とみる

21-23  
座談：子どもとみる

24-27  
ガイドスタッフの歩み/  
子どもプログラムの歩み

28  
データ



はじめに

東京国立近代美術館の解説ボランティアである、MOMAT ガイドスタッフの活動が始まって、まもなく9年になります。

ガイドスタッフの主な活動は、当館のコレクション・ギャラリーで毎日行っている「所蔵品ガイド」です。43名のガイドスタッフ全員がローテーションを組んでこの所蔵品ガイドにあたり、2003年のスタート以来、3万人以上の来館者を迎えました。またガイドスタッフは、近年注目されつつある子どもへの鑑賞教育の担い手でもあります。複数のギャラリートークを同時展開するスクールプログラムは、ガイドスタッフの協力なしでは成り立ちません。

所蔵品ガイドや教育プログラムに共通するのは、ガイドスタッフの「参加者に寄り添い、言葉を引き出す」という姿勢です。対話を通して鑑賞者自身の気づきや解釈を引き出すこの方法は、一方的な解説では得られない豊かな鑑賞体験を与えてくれます。「作品が身近に感じられた」「絵が全く違うように見えてきた」「他の人の意見を聞くのが楽しい」といった参加者のコメントが、本書にもたくさん紹介されています。東京国立近代美術館のギャラリーでは、ガイドスタッフによって、小さなドラマが日々生み出されているのです。

来館者とコレクションの良き出会いのために、常に努力と協力を惜しまないガイドスタッフのみなさんに感謝し、創立60周年となる今年、記録集を刊行することとなりました。東京近美でトークするその姿から『トーキング・トーキンビ』と名付けた本書が、美術館やボランティア活動に携わる方々にも役立つこととなれば幸いです。

2012年3月  
東京国立近代美術館

# ガイドスタッフができるまで

## 新しい普及プログラムの担い手

### 導入

ガイドスタッフが生じた背景には、2001年の独立行政法人化と、2002年の創立50周年を機に行われた大改装があります。リニューアルオープンして展示面積が約1.5倍になった所蔵品ギャラリーで、どのような教育普及事業を行うか。改装前に行っていた月に1回の研究員ギャラリートークより、親しみやすく参加しやすい解説プログラムはできないだろうか。このように検討していた折、文化庁から生涯学習ボランティア事業推進の呼びかけがあり、解説ボランティアを導入することが決まりました。そして、2002年4月から6月にわたり、解説ボランティアのいる美術館・博物館にヒアリングを行い\*、目的や活動詳細、募集と選考、研修や例会、専用ルームの有無や日程の調整方法、保険などの実務事項に数多くの教示をいただき、導入体制を整えました。その後2002年秋の募集を経て、2003年5月より活動を開始し、現在に至ります。

\*ヒアリングに際し、江戸東京博物館、川村記念美術館、埼玉県立近代美術館、東京国立博物館、東京都現代美術館、名古屋市美術館より協力を得ました。

### 募集

定期的な募集ではありません。欠員が出た時に補充募集をしています。毎日の所蔵品ガイドを含むガイド活動をローテーションしていける人数を40名程度と考え、現在のところこれを維持しています。これまで4回の募集をし、のべ439人の応募をいただきました。

応募条件は年齢(20歳以上)と全7回の養成研修に参加できることです。応募用紙には、学歴、職歴、顔写真の記載欄はありません。



### 選考

書類選考と面接を通過した方が養成研修生となります。

募集要項には、ガイドスタッフは「美術館と来館者との架け橋」とであると記載しています。

審査基準は、活動へ対する意欲、コミュニケーション能力、自発的な学習意欲などですが、最も重要視したのが「架け橋としての役割」を認識できる人です。知識を披露するだけの自己満足に終わるのではなく、常に来館者と同じ目線に立って多くを分かち合える、ホスピタリティーを持てる人を採用したいと考えています。

### 登録

ガイドスタッフとして登録後、ガイドスタッフ証が授与されます。任期は設けていませんが、2年ごとに登録を更新しています。登録後、美術館の負担でボランティア保険に加入しています。

### 養成研修

書類選考と面接を通過した養成研修生は、数ヶ月かけて計7回にわたる研修に参加します。養成研修の内容は主に、当館研究員による所蔵作品についての概説と、ガイドの実践トレーニングです。特に後者については、レクチャーと実践を繰り返し、きめ細かに指導します。

研修生の課題は、所蔵作品と近代日本美術について知るとともに、対話による鑑賞の意義を理解し、コミュニケーションを重視した手法を身につけることです。研修を終え、所蔵品ガイドを担当する時、ガイドスタッフは、どの作品をどのようなテーマで語るかを自分で考えなければなりません。知識に裏打ちされ、かつオリジナルなトークを展開するためには、欠かせない研修です。



研修生全員が、トークをする側とされる側を経験する

### 養成研修スケジュール

\*3期生の場合(2008年) [ ]はガイドの実践トレーニング

|       | 1<br>1月12日                                       | 2<br>1月26日                                               | 3<br>2月9日                                                     | 4<br>2月23日                    | 5<br>3月8日             | 6<br>4月5日     | 7<br>4月15日～19日                     |
|-------|--------------------------------------------------|----------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------|-------------------------------|-----------------------|---------------|------------------------------------|
| 13:00 | ガイダンス<br>当館概要<br>「ガイドスタッフ活動について」                 | 展示室での来館者対応1<br>障がい者対応<br>展示室での来館者対応2<br>車椅子実習<br>アイマスク体験 | 概説3<br>「戦中・戦後の美術」                                             | 概説4<br>「50・60年代の美術」           | 概説5<br>「70年以降の美術」     | 概説6<br>「版画」   | ギャラリートーク<br>修了発表                   |
| 14:00 | 美術情報の調べ方、<br>ライブラリの使い方                           | 「接客・緊急時対応」                                               | 課題1<br>ギャラリートーク<br>発表<br>研修生を<br>参加者にして<br>作品前で実演し、<br>指導を受ける | 「鑑賞教育について」                    | 課題2<br>ギャラリートーク<br>発表 | 概説7<br>「写真」   | 3作品を組み合わせた<br>ギャラリートークを<br>修了試験とする |
| 15:00 | 概説1<br>「明治・大正期の<br>美術」                           | 概説2<br>「昭和戦前期の美術」                                        |                                                               | 子ども対象の<br>モデルトーク体験<br>グループワーク |                       | 修了トーク<br>個別相談 |                                    |
| 16:00 | 課題1説明<br>明治～戦後までの<br>作品1点を選び、<br>トークプランを<br>作成する | 課題1の個別相談<br>トークプランを<br>チェックし、<br>発表にそなえる                 | 課題2説明<br>現代の作品を<br>1点選び、<br>トークプランを<br>作成する                   | 課題2の個別相談<br>トークプランのチェック       | 修了トーク<br>課題説明         |               |                                    |
| 16:30 | 資料ガイダンス                                          |                                                          |                                                               |                               | 発声法                   |               |                                    |
| 17:00 | 懇親会                                              |                                                          |                                                               |                               |                       |               |                                    |

### 館長の声



当時の河合隼雄文化庁長官が提唱した文化ボランティアを先んじて導入したのが東近美のガイドスタッフ制度でした。当初の関係者の苦労はもちろん、スタッフの方々の熱意や向学心と教育普及担当のフォローとが相まって着実な成果を上げています。故河合長官ならきっといつもの軽妙な駄洒落で大いに褒めて下さるに違いありません。

加茂川幸夫 館長

# ガイドスタッフの 活動内容

毎日の所蔵品ガイドを中心に、  
コレクションと来館者をつなぐさまざまな活動を行う

## \*全員が参加するもの

- ・所蔵品ガイド ⇒ p.8
- ・例会
- ・フォローアップ研修

## \*その時々募集し、有志が実施するもの

- ・ハイライトツアー ⇒ p.11
- ・スクールプログラム ⇒ p.12
- ・生涯学習団体等への解説
- ・子どもプログラム ⇒ p.24
- ・その他、他館ボランティアとの交流、自主勉強会など

## 例会

所蔵作品展会期の最初の土曜日に例会日を設定しています。ガイドスタッフ全員が顔を合わせる大切な日です。

## タイムテーブル

**14:00～15:00 研究員による所蔵品ガイド**  
来館者とともにガイドスタッフも参加します。

**15:00～17:00 例会**  
教育普及室からのお知らせ、ガイドスタッフから出た議題を話し合います。

**17:00～18:00 研究員による展示ポイント解説**  
閉館後に行います。



所蔵品ギャラリーには、1万点ほどのコレクションから選ばれた約200点の作品が展示されています。年間約5回の展示替えのたびに、ガイドスタッフはコレクションについて学びます。

## 世話人

所蔵作品展の会期ごとに、ガイドスタッフの中から各回2名の世話人を互選しています。世話人は所蔵品ガイドの担当日を調整し、スケジュール表を作成します。また世話人は、例会の主宰や、美術館スタッフとの連絡調整なども行います。

## 美術課長の声

急遽立ち上げが決まったガイドスタッフ。他館の事例の調査から始め、館内の制度や規則の整備、募集、面接、決定と、すべてが待ったなしでした。研修として行った全10回の講座も手探りで、講義と講義の間の休憩時間にあわてて資料を作るような綱渡りもたびたび。このバタバタぶり、1期生のみなさんは知っていてさりげなく見守ってくださっていたのかも知れません。初めてのトーク実習では、声も脚も震えて、なんていう方がけっこういらしたと、昨日のここのように思い出します。

蔵屋美香 美術課長  
(ガイドスタッフ発足当時の教育・普及係長)



## 活動費

ガイドや例会への参加に対し、1日1000円の活動費を支給しています。活動費を支給することとしたのは、ガイドスタッフが担当するガイドやプログラムは、美術館が依頼する重要な仕事であることを、ガイドスタッフも美術館も認識する必要があると考えたからです。

## 日誌

担当した所蔵品ガイドの様子は日誌に記録し、メンバー内で情報を共有しています。これまでのガイドの全てがつまっている日誌は、ガイドスタッフの宝です。日誌を読めば参加者の反応や感想がわかり、仲間のガイドの工夫を知ることができます。以前は、ガイドの様子は美術館に来て日誌ファイルを読まないといわかりませんでした。2010年4月から日誌をブログ(非公開)化したことで、自宅からでも所蔵品ガイドの状況を把握できるようになりました。

ブログ化にあたっては、まずトライアルメンバーを募り、2ヶ月のトライアル期間を設けて、本格導入に向けての課題をクリアしました。ブログにはコメントを書く欄があり、参加した仲間によるコメントを読むことができます。自分では気付かなかったことや、新たな発見も得られると好評です。

## フォローアップ研修

養成研修とは別に、自己研修をバックアップする意味で、年に2回程度、美術館がフォローアップ研修を行います。研修内容は、実技研修や、各分野の専門家を講師に迎えた講義、日頃のガイドを振り返るためのワールドカフェ方式のワークショップなどさまざまです。

|        |                           |                                                            |                                                    |
|--------|---------------------------|------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------|
| 2003年度 | 2003年11月15日               | 日本画の技法と材料                                                  | 古田亮<br>中嶋壽子 (MOMAT ガイドスタッフ)                        |
|        | 2004年2月28日                | こどもの発達と鑑賞                                                  | 岸本雅行 (中央区立坂本小学校教諭)<br>武藤篤美 (坂戸市立浅羽野中学校教諭)          |
| 2004年度 | 2004年11月13日               | 写真の鑑賞について                                                  | 増田玲                                                |
|        | 2005年2月19日                | 彫刻鑄造について                                                   | 櫻井淳一 (櫻井美術鑄造代表取締役)<br>村山万介 (台東区立朝倉彫塑館学芸員)          |
| 2006年度 | 2006年6月3日                 | 大原美術館の教育普及プログラムについて                                        | 柳沢秀行<br>(大原美術館学芸課長・プログラムコーディネーター)                  |
| 2007年度 | 2007年6月9日                 | 小中学校の美術教育<br>一学校での子どもたち                                    | 西村德行 (筑波大学附属小学校教諭)<br>浜脇みどり (豊島区立千登勢橋中学校教諭)        |
| 2008年度 | 2008年3月9日                 | 株式会社サカベ絵具工場見学                                              | 引率: 藤田百合                                           |
|        | 2008年3月29日                | 油彩画の技法と材料                                                  | 藤田百合                                               |
|        | 2008年11月8日<br>2008年11月13日 | 収蔵庫見学                                                      | 中村麗子<br>蔵屋美香                                       |
|        | 2009年3月15日                | コレクション講義<br>「フランス・ペーコン」                                    | 保坂健二郎                                              |
| 2009年度 | 2009年10月24日               | 視覚障がい者への鑑賞サポート                                             | 太田好泰、山口里佳子、長澤伸子、大内秋子<br>(NPO エイブル・アート・ジャパン)        |
| 2010年度 | 2010年12月25日               | ワールドカフェ<br>「所蔵品ガイドをよりよくするために」                              | 進行: 一條彰子                                           |
| 2011年度 | 2011年5月21日                | コピアートペーパー ワークショップ                                          | 浅見俊哉 (アーティスト、八潮市立八條中学校教諭)                          |
|        | 2011年10月15日               | A: 「作品の貸出について」<br>B: 「西美の所蔵作品の概説」<br>*国立西洋美術館でのボランティア研修に参加 | A: 箱守栄一 (美術品リスクコンサルタント)<br>B: 幸福輝 (国立西洋美術館上席主任研究員) |

## 特典

所蔵作品展や企画展は無料で観覧できます。また、各企画展招待券やカタログの進呈、資料用コピーの無料化、ミュージアムショップの割引などの特典があります。

## メール

円滑な活動を行うための通信手段として、メールやメーリングリストを活用しています。

## 教育普及室⇄ガイドスタッフ

お知らせ、団体解説のトーカー募集など

## 世話人⇄ガイドスタッフ

スケジュールリングなど

## ガイドスタッフ同士

情報交換や所蔵作品に関する質問などの話題

ガイドスタッフ間で解決できない専門的な質問は、教育普及室を通して研究員に確認します。回答はメーリングリストで報告し、皆で共有しています。

# ガイドスタッフルーム大公開

準備、休憩、勉強、打ち合わせ、  
情報交換ができる、ホームベースのような部屋

「夏休み！こども美術館」の  
ための材料箱。

2003年からの所蔵品ガイド  
の日記が保存されています。  
ガイドスタッフの宝です！

ガイドスタッフのキャラク  
ター、「モマたん」の3D模型。

所蔵品関係の記録などを  
みんなで見るTVとDVD。

ここで日記を書きます。

コレクションに関連した図書が約500冊！  
貸出もできます。退会したガイドスタッフの  
寄贈書や、当館から配布するカタログで構  
成されています。

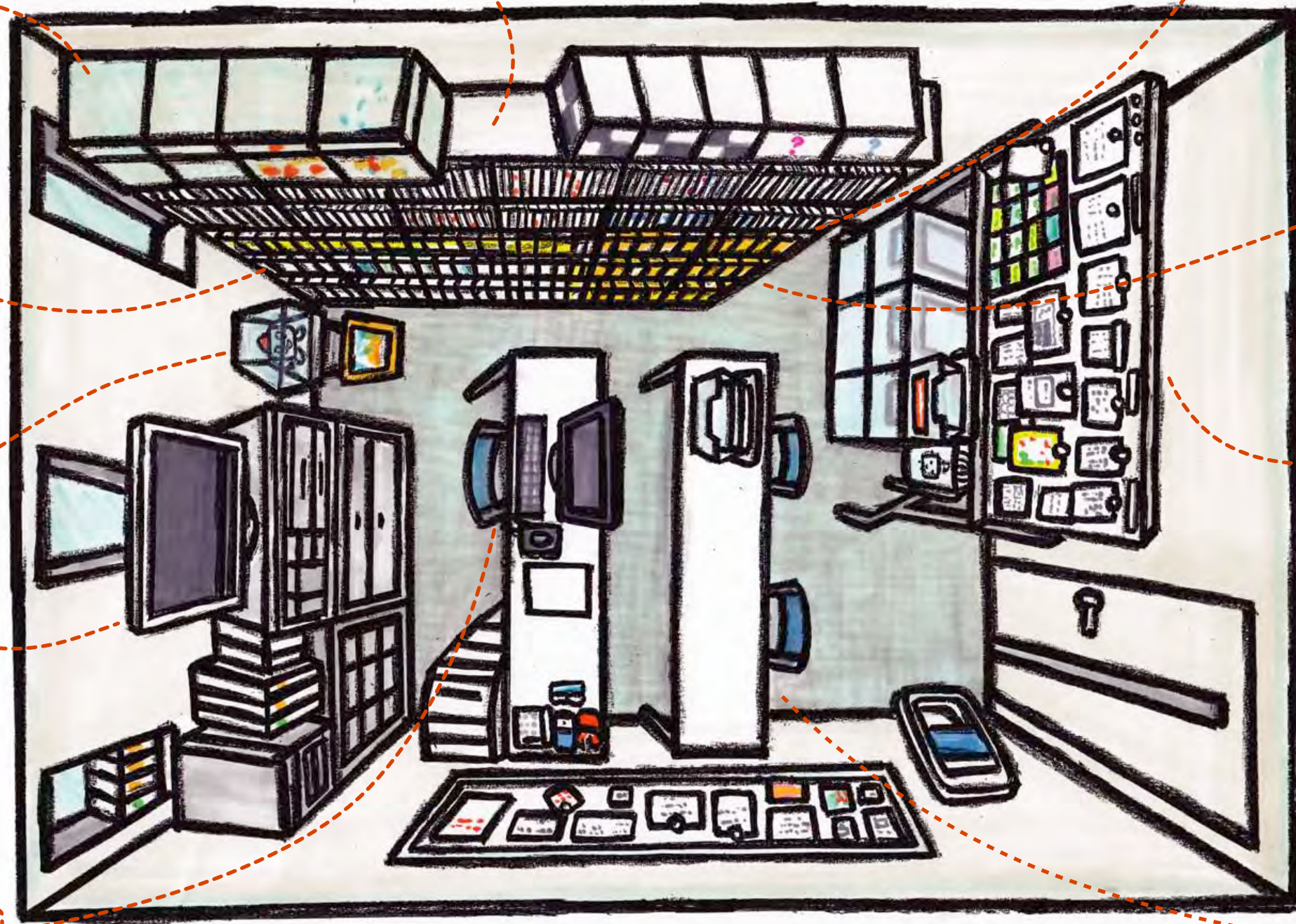
当初は司書資格を持っているガイドスタッフが中心となり、  
ルーム図書の分類や整理を行ってきました。今では世話人の  
仕事となり、ガイドスタッフ全員が図書整理に携わるよう  
になっています。図書番号の入力作業、貸出ラベル貼りなども  
行っています。

所蔵作品について調べ、皆で共有できる  
ように自主的に集めた資料は、作家ごと  
にファイルしています。

ひとり1個の「個人ボック  
ス」が並びます。配布物を入  
れるなど、私書箱のよう  
に使われています。

美術館からのお知らせや、  
ガイドスタッフ同士の情報  
交換ができる掲示板。

開館日は準備をしたり、  
お昼をとったり、  
ミーティングをします。



## 所蔵品ガイド

### 対話をしながらギャラリーを巡るガイド

ガイドスタッフの主な仕事は、毎日14時から1時間、所蔵品ギャラリーで行う所蔵品ガイドです。2003年5月23日にスタートして以来、約2300回以上実施され、約3万人が参加しました(2011年末時点)。

所蔵品ガイドは、いわゆる一般的な展示解説ではなく、ガイドスタッフが参加者の発言や感想を引き出しながら展開する「対話型」のギャラリートークであり、多様な解釈や対話の深まりを楽しむことができます。参加者が主役、ガイドスタッフはいわば進行役です。日替わりで担当者や内容が変わるため、日々異なるガイドを楽しめる所蔵品ガイド。今ではリピーターも増え、当館の定番プログラムとなりました。

#### ある日の所蔵品ガイド(2011年11月8日) 準備から片付けまで

12:30 当番のガイドスタッフが美術館に到着

13:30 看板出し

エントランスにテーマと作品を書いた看板を出します。



館内では2度のアナウンスが流れる

13:55 開始5分前に待機

今日のテーマは「絵に誘われて」。5分前には4名のお客様が集まりました。

「アナウンスにもありましたように、私が一方的に解説するのではなく、みんなで感じたことを話しながら作品を見ていきますので、みなさんの感想を聞かせてください」



一方的に解説を聞くと思っていた参加者は、戸惑いながらもガイドがどのような展開になるのか期待を持ってくれたようです。当館の概要を簡単に説明し、いよいよ作品の前に誘います。

14:00 「所蔵品ガイド」スタート

1. 下村観山《木の間の秋》1907年



「タイトルが《木の間の秋》ですが、画面から秋を感じますか？」

参加者全員で秋を感じるモチーフを次々に挙げていきます。



2曲1双の屏風。一見、右隻と左隻の画面がつながっているように見えますが、画面をよく観察しているうちに、別々の場面であることに気がきました。ガイドスタッフは参加者の気づきを引き出し、発言をつなぎます。

「作者が描きたかったものは何だったのでしょうか？」

「光！」(意見が即座に出ました)

「うん、光を感じるね」

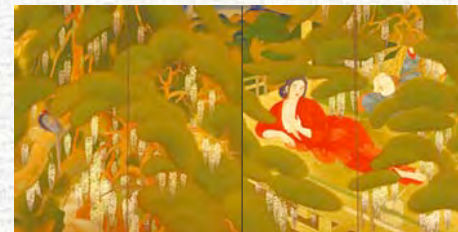
作品内の光源を確認し、最後に、雑木林の中を散策するように左から右へ歩きながら鑑賞しました。



「葉脈が金で描かれてる！」

近づいてみると、新たな発見があります。

2. 土田麦僊《湯女》1918年



「大きな作品なので、遠くから眺めたり、近づいたりしながらご覧ください。最初にどこに目がいきますか？」

「横たわる女の人」

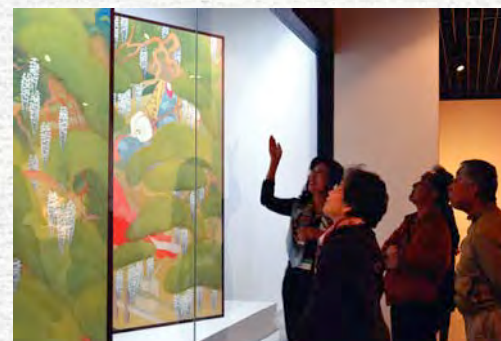
「人物だけでなく、画面を埋め尽くす松にも目がいきます」

「藤」

「キジ」

「キジは何羽いますか？」

「つがいです。つがいというのが、何か意味がありそうですね」

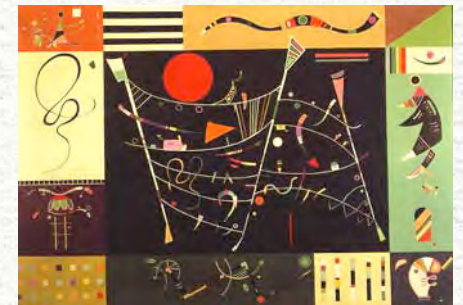


目にとまるモチーフを確認しながら、意見を交わします。画面全体を見ているうちに、参加者から「音が聞こえる」という感想が出ました。

「それは、どのような音でしょうか？他のお客様も音が聞こえてきますか？」

参加者全員で音を感じるものを挙げると、三味線の音や川の音など、見れば見るほど音が聞こえてきました。作品に関する解説も加えながら、描かれている二人の人物像の関係を想像して終わりました。

3. ワシリー・カンディンスキー《全体》1940年



最後に鑑賞した作品では、参加者から「風を感じる」「音楽が聞こえる」と、さまざまな意見が飛び交いました。

音楽という視点で画面を見てみると、ひとつひとつのモチーフが音楽と関連のある形に見えてきました。参加者が五線譜のような形も発見しました。最後にみんなで画面から聞こえてくるリズムを想像しながら終わりました。



カンディンスキーが音符を点に翻訳した資料を見ている様子

ガイド終了後も、参加者から「もっとトークを聞きたい」と言っていただきました。ガイドを最後まで楽しんでいただけたようです。

14:45 終了

15:00 看板の片付け

## 15:15 日誌

当日のあらましをガイドスタッフ限定のブログに投稿し、印刷したものをファイルに綴じます。

2011/11/08 (火曜日)

- ・テーマ：絵に誘われて
- ・所要時間：45分
- ・天気：曇り
- ・参加人数：9人
- ・作品名：下村観山《木の間の秋》土田麦僊《湯女》カンディンスキー《全体》

参加者は、男性／女性それぞれお二人連れ、ちょうど館を訪ねてくださったガイドスタッフOB、この5人とガイド仲間が3作品お付き合い下さいました。《木の間の秋》《湯女》では、付近にいた来館者何人かがついでに聞いていてくださった、というようなゆるい感じのガイドでした。

テーマの「絵に誘われて」は、カンディンスキーの「絵画も音楽と同じように、ここから見始めてここで終る、という様に作家が意図することも可能だ…」という文章を読んだ事より、それぞれの画を作家が意図した（のではないかと思われる）順に観ていったらどうだろう…という試みでした。

少人数で打ち解け易かった事、とても良い感性で思っ

日誌

たまを言ってくださる参加者であったため、《木の間の秋》では、この木はなにかと考え、光を感じながら観山の導くままに林の中に分け入れたように思えました。

《湯女》では、松の葉冠の間に覗ける、湯女の様子、雉子の番や水の流れを順を追って観て行きました。参加者のお話を聞くうち、用意したオチを言い忘れてしまったという反省はありますが、半信半疑ながら聞いた「この画を、湯女と限定しなかったらどんな光景だと思いますか？」という質問に、即座に「宮本武蔵のアケミとオコウの姿」と答えられ、参加者のイメージが膨らんだことを感じました。こちらが不勉強の為、其処からまた話を膨らませる事ができなかったのが残念でした。

《全体》は判りにくい作品かと思いましたが、積極的にお話してくださる男性が自分の感じたままを最初から「風」「音楽」…と発言してくださり、それによって私自身のイメージを膨らみ、それがまた他の人にも伝わって…という具合に進みました。ガイド自身の作品理解が不足であったため、決定的な説明ができなかったのですが、それなりに楽しめ、もっと学ばなければという思いを強く感じながら、終了となりました。

16:15 終了

## 所蔵品ガイドの感想

作品がより身近に感じられました。  
(70代 女性)

他の人の見方、感じ方が参考になった。「単に眺める」のではなく、「積極的に見る」を教わりました。  
(60代 女性)

作品の前で立ち止まり、思いをめぐらし言葉に出すという行為がとても楽しく感じました。  
(60代 女性)

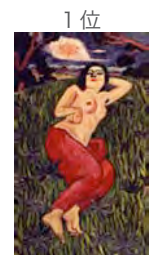
他の方の意見が聞けて絵に対する見方が広がりました。  
(20代 女性)

ガイドさんに色々と問かけられるだけで、絵が全く違って見えるのと、新しい発見がいろいろあって、本当に得した気分です。  
(30代 男性)

毎日ガイドがあるなんて素晴らしい。  
(60代 女性)

一人で来たので感想を話せる場があって良かったです。  
(70代 女性)

### 所蔵品ガイド回数ベストテン



萬鉄五郎  
《裸体美人》  
1912年



原田直次郎  
《騎龍観音》  
1890年  
護国寺蔵（寄託）



岸田劉生  
《道路と土手と堀（切通之写生）》  
1915年

- 4位：アントニー・ゴームリー《反映／思索》2000年  
5位：荻原守衛《女》1910年  
6位：新海竹太郎《ゆあみ》1907年  
7位：古賀春江《海》1929年  
8位：北脇昇《クオ・ヴァディス》1949年  
9位：和田三造《南風》1907年  
10位：吉原治良《黒地に白》1965年

所蔵品ガイド参加者アンケートより（2008年～2010年）

## ハイライトツアー

近代日本美術の流れを概観できるツアー

毎月第一日曜日の11時からハイライトツアーを実施しています。ハイライトツアーは1時間ほどかけて、コレクションの見所を押さえながら4階～2階を巡るものです。無料観覧日に実施することもあり、参加者数は毎回30人程度。所蔵品ガイドと比べると、作品や作家に関する情報を効率良く伝達することに重きがおかれています。元は研究員が行っていたハイライトツアーですが、2006年4月からガイドスタッフが担当することになりました。リピーターも増え、所蔵品ガイド同様に定着しつつあるプログラムです。



ハイライトツアーは時代の流れに沿って、明治・大正期の美術から始まる



100年間の美術を1時間で巡って終了

## ハイライトツアー参加者の感想

短い時間の中で沢山の解説があり有意義。  
(50代 男性)

知らないと、ただ見過ごすところを色々教えてもらえた。  
(60代 男性)

毎月、楽しみにしています。  
(男性)

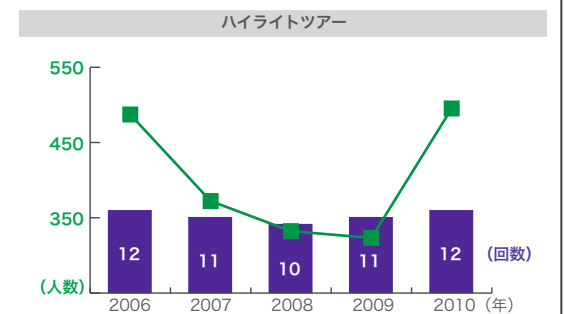
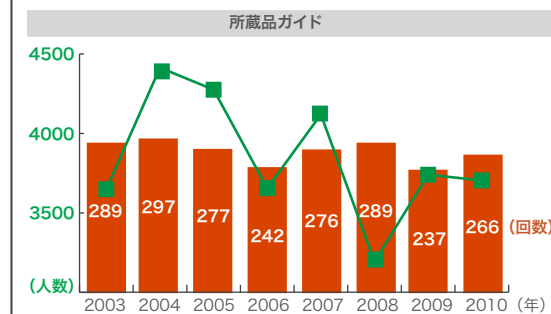
所蔵作品の全体像を把握するのによかった。  
(50代 男性)

時系列で解説を聞きながら鑑賞することで、社会背景も知ることができて大変面白かった。  
(40代 女性)

美術鑑賞をより身近なものにしていいただき、楽しんでいます。  
(60代 女性)

ハイライトツアー参加者アンケートより（2007年～2011年）

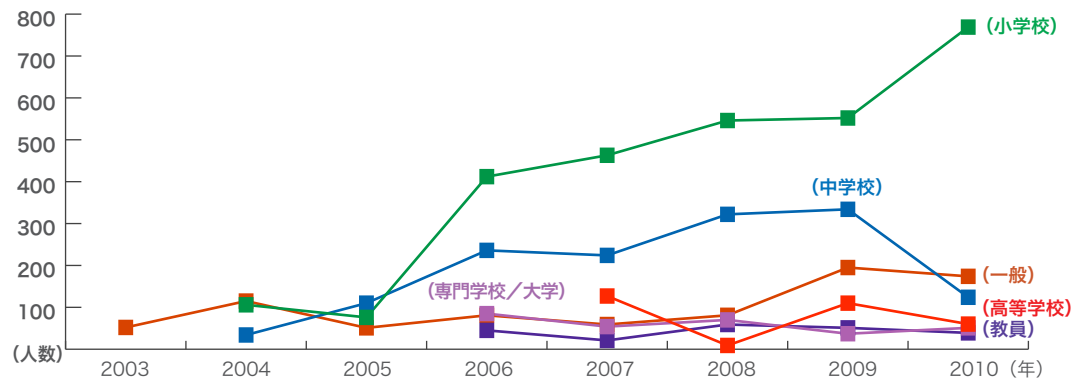
### 所蔵品ガイド&ハイライトツアー回数／参加者



## スクールプログラム 授業で訪れる児童生徒にギャラリートーク

東京国立近代美術館は、学校と連携した鑑賞教育を、スクールプログラムとして行っています。2003年からは、授業で来館する小・中学生にガイドスタッフがギャラリートークを行うようになり、対応できる学校数を増やしてきました。標準的なスクールプログラムは、児童生徒を10名前後のグループに分け、それぞれにガイドスタッフが1名つき、3点の所蔵作品を約50分かけてじっくり見せていくというものです。所蔵品ガイドと同様に、対話によって子どもたちの思いや考えを引き出し、言語活動を取り入れながら、鑑賞力を養います。スクールプログラムの内容は、教員との打合せを元に、教育普及研究員とガイドスタッフ間で入念に決められます。授業の目的、滞在時間、児童生徒の学齢や人数などに応じて作品選定を行い、時にはワークシートやクイズも用いて、最適なプランを学校ごとに用意します。実施後は必ず反省会を行い、改善点などを共有し、次回に生かします。

ガイドスタッフが担当した団体受入参加者数



### ある日のスクールプログラム (2011年11月22日 港区立港陽小学校6年生)

#### 教育普及室の準備

##### 8月30日 申込み

6年生48名のスクールプログラムの申込みを受付けました。

##### 10月3日 トーカー募集

トーカー5名をメーリングリストで募集。

##### 11月1日 事前打合せ

教育普及研究員が図画工作担当教諭と、美術館で打合せを行いました。アートカードを使った事前授業を行うことから、各グループ1点はアートカード掲載作品をトークすることに。また、ギャラリートーク後の自由鑑賞時間にワークシートを使用したいとのことでした。当日の児童の持ち物や、特にケアが必要な児童がいるかどうかについても確認します。

##### 11月1日 プラン設計開始

打合せした内容をトーカー5名に伝え、トーク希望作品を選定してもらいます。教育普及室は作品選択や内容について確認。さらにグループ間で導線がバッティングしていないかも確かめます。

##### 11月11日 詳細プラン決定

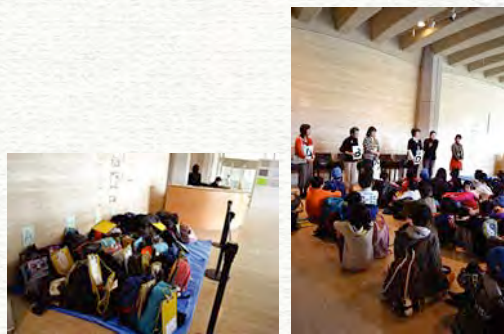
当日のタイムテーブルや、グループごとのトーク作品を記した詳細プランを決定し、担当教諭に伝えました。

#### 9:40 スタッフ最終ミーティング

タイムテーブルなど、その日の留意点を確認します。

#### 10:00 美術館に到着

まずはエントランスで挨拶。その後、グループに分かれて、美術館でのマナー(作品にさわらない、走らない、騒がない)を伝えます。



ガイドスタッフS(以下S):東京国立近代美術館へようこそ。みなさんが来てくれるのを楽しみに待っていました。今日みなさんをお願いしたいのは、お気に入りの作品を見つけてほしいということです。



S: みなさんに作品を見るということについてお話したいと思います。まずはじっくり見てください。遠くから、近くから作品をじっくり見てみて、作品に表れていることを出来るだけ想像をして、話をしてください。そして、友達のお話も聞いてくださいね。

#### 10:10 作品鑑賞

##### 1. 小出梢重《ラッパを持てる少年》1923年

最初の作品ではモデルの男の子について考えました。



S: まずは近くで見てみて。この子は何歳くらいかな?

「5歳!」(ほとんどの子どもがそう答える)

「手が膨れてるから幼いと思う」

S: 正解は5歳の男の子でした。みんなすごいね! では、この子の気持ちはどうだろう?

「まわりの色が暗いから、さみしそうに見える」

「ラッパを吹きたそう」

「悲しそう」

S: どうしてそう思ったの?

「目が涙目だから」

「笑ってない」

S: これを描いた画家さんとこの子は、どんな関係?

「自分の子どもの頃を思い出して描いている」

S: 実はお父さんが息子を描いたんです。5歳の子どもが10日間もモデルをしたそうです。

#### 2. 高松次郎《No.273(影)》1969年

白い画面には大きな影が! 作者はどうして影を描いたのか、話し合ううちに考えが深まっていきます。



S: 最初は近くから見て、次に少し離れて見てみましょう。

「影がふたつある」

「床にも映っている」

S: これは写真? それとも絵だと思う人?

(手を挙げる。絵: 7人、写真: 1人)

S: 写真と思った人は、どうしてそう思ったの?

「絵だったらもっと色を使う」

S: これは写真に撮ったものを絵に描いた、限りなく写真に近い作品なの。何の影かな?

「手がぶっくりしてるから赤ちゃん」

「ポーズを見ると、この赤ちゃんとても楽しそう」

S: こんなに大きな赤ちゃんの影ができる? そうしたらどのあたりにいると思う?

(作品の前に座っていた子どもたちは立ち上がって、作品から離れて、位置を決めていく)

S: どうして作家さんはこんな影を描いたと思う?

「背景もないし、足も描いてない……」

「見ている人に考えてほしいから、足を描かなかったのかな」

「赤ちゃんは生まれるまで存在していない。“いる” “いない” ってことを考えるために赤ちゃんを描くのはいいと思った」

S: すごいね。みんなよくそこまで考えてくれました。作家さんも存在ってということについて考えていた人だから、こういう風に描いたのかもね。

### 3. アントニー・ゴームリー《反映／思索》2000 年

最後の作品はガラスを挟んで室内と屋外に展示された人型の彫刻。二人は向き合って何を思っているのか、ふたつを見比べながら意見を出し合いました。



「男の人」「鏡みたい」「色が違う」と口にしながら、作品へと近づいていく

S：この人はどんな気持ちだろう？

「外にいる人は自由で、中にいる人は自由じゃない」「表情がない。目のくぼみはあるけど、のっぺらぼう」

S：向こう側に自分と同じ人がいたら、どんな気持ち？町の中で自分と同じ人に会ったらどう？

「何でって思う」「どっちが本物なのか、驚くと思う」

S：向かい合って何をしてる？

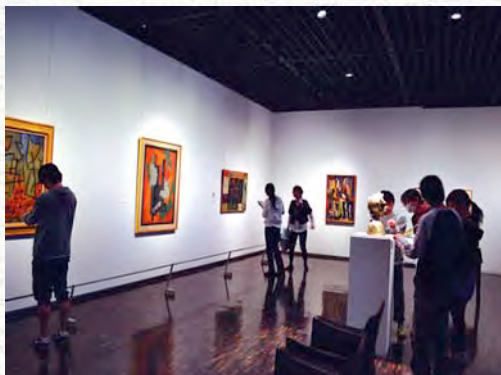
「しゃべってる。『お前何だ？』『何でここにいるんだ？』『お前こそなんだ？』って」

この後ワークシートを配布。タイトルと二人の台詞を考えてもらい、発表しました。

S：今日は作品をじっくり見て、いろいろと想像してくれたね。どうもありがとう。

### 11：00 自由鑑賞時間

先生が用意したワークシートに、気に入った作品や感じたことを記入しながら、自由に鑑賞しました。



### 11：45 再集合、美術館を出発

S：もっと見たかったかな？楽しい時間でしたね。一生懸命見てくれて嬉しかったです。初めをお願いしていた、お気に入りの作品を見つけた人はいますか？またお気に入りの作品に会いに、そして別のお気に入りの作品を見つけに、また来てくださいね。



### 11：50 反省会

ガイドスタッフルームで、各グループごとにトークの内容や子どもの様子を伝え、反省会を行いました。

### 12：30 終了

後日、小学校から感想文が届きました。

どの作品も、作者の思いがこめられていた。

いろんな絵を見て、すごく興味深かったです。いつもは絵や彫刻を見るだけで、何も考えなかったけど、今度からは作者がどんな気持ちでかいて、作っているのか、絵の表情をもっと観察したいです。

## スクールプログラムに参加した子どもたちの感想

ほかの人の見方、考え方がわかって世界が広がったような気がしたところが楽しかった。  
(小6 男)

1つの作品のことについてみんなで話すのが楽しかった。また来たい。  
(小4 女)

それぞれの絵を深く違う視点から知ることができました。それぞれの絵にとても深い意味があり、絵がもっと好きになった気がします。  
(中1 男)

みんなの意見が聞けて、空想をより広げることができた。  
(小5 男)

作品を深く見て、考えることで、新しい発見ができました。  
(中1 女)

いろいろなえなどで自分で思ったことや、ほかの人がいったことでぜんぜんちがいがびっくりしました。  
(小4 女)

ギャラリートークでいろんな意見をきくことで、絵の見方がかわったりして、とても楽しかったです。  
(中1 女)

みんなの意見で見方が変わったり、「そういう見方もあるんだなあ」と思えたところが楽しかった。  
(小5 女)

手紙や「ふりかえりシート」より(2008年～2010年)

## スクールプログラムの引率教員や保護者からの感想

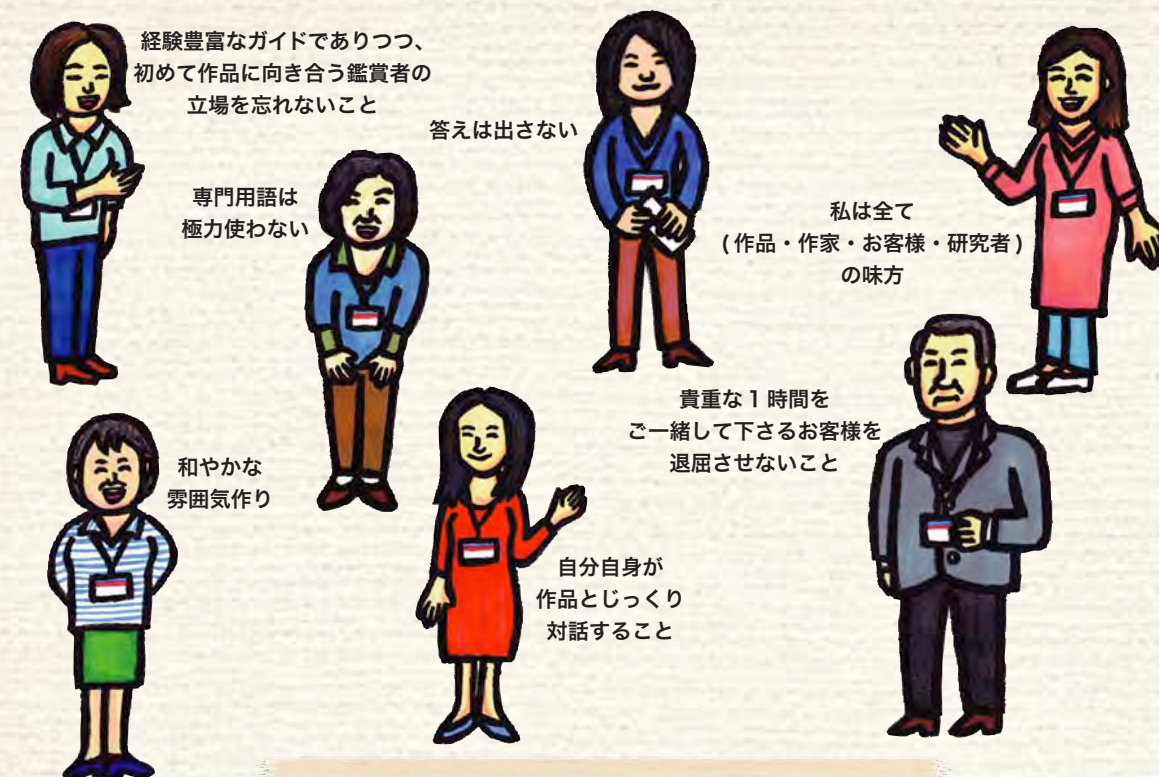
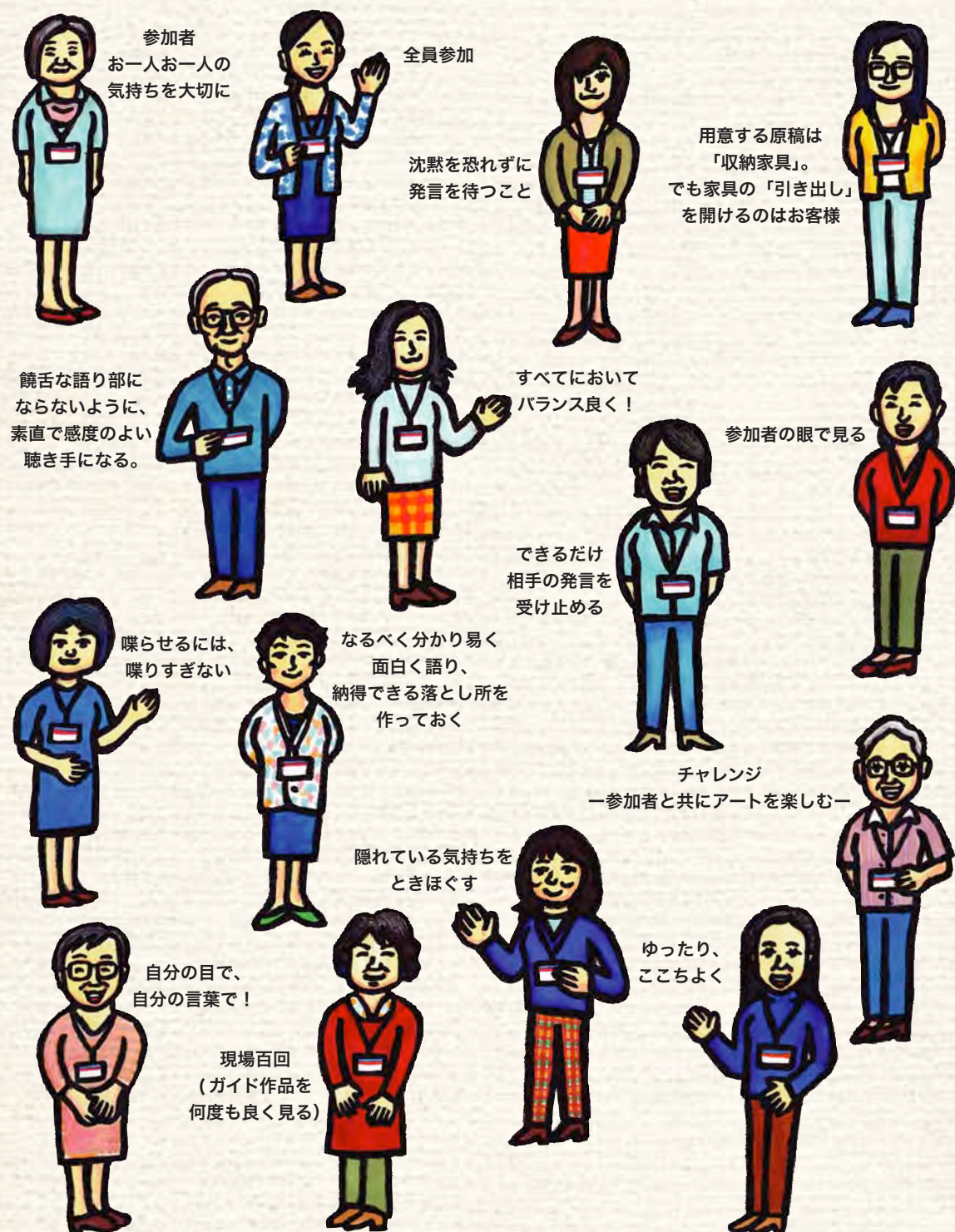
今回のプログラムに参加して、子どもたちは「見る」楽しさ、感じたこと考えたことを言葉で話す喜びを感じているようでした。  
(小学校教諭)

皆、自由に感じたことを発言していました。他の子と違う意見でも恥ずかしがらず、自分の意見を言ったり、想像をどんどんふくらませて、絵のサイズよりも大きな絵の中の世界を見ることができていました。  
(小学校引率協力の保護者)

みなそれぞれ「何かを見て、感ずる心」を養っていただいた一日を過ごせたように思います。ギャラリートークでの子どもたちの積極的な姿勢が見られたことに教員一同感激しております。  
(中学校教諭)

## ガイドスタッフのひとこと

### 所蔵品ガイドで工夫していることや、心がけていることは？



### ガイドスタッフをやっていて良かったと思う瞬間



## あなたにとって、ガイドスタッフの魅力とは？



## 大人とみる

ガイド経験豊富な4名のガイドスタッフに語ってもらいました



Tさん



Hさん



Kさん



Sさん

ガイドスタッフに応募した動機を教えてください。



私は既に埼玉県立近代美術館でボランティアガイドをしていました。その美術館のコレクションは東京国立近代美術館（以下 東近美）のものと近いけれど、ひとつの美術館だけだと範囲が狭まってしまうし、もっと広く深く勉強したいと思い応募しました。



会社を退職した後、大学で好きだった美術について勉強していました。卒業時に、タイミングよくボランティア募集を知りました。何か美術に携わりたいと思っていたので、エントリーしたんです。ただ、どちらかというと、現代美術に関心がありましたが、近代美術を学べば学ぶほど奥が深いことがわかり、現在に至ります。



岡山県立美術館でボランティアガイドをしていましたが、家庭の事情で東京に滞在する時間も多くなり、東京でもボランティアをしたいと思っていた時に応募しました。同じようなコレクションのある美術館であれば、新たな場所でも活動しやすいと感じました。



私も東京都現代美術館でボランティアガイドをしています。東近美のコレクションは近代から現代にかけて幅広く、しかもコンスタントに展示替えされるため、ガイドのやり甲斐を感じ、応募しました。

所蔵品ガイドは対話を重視したトークであるという特徴を持っていますが、いかがですか？



自分ひとりの世界でじっくりと作品を鑑賞することに慣れていたので、人と話をしながら鑑賞することには迷いもあり、疑問を抱きながらスタートしました。でも、養成研修で、みんなと話をしながら鑑賞した時、ひとりひとりが違う見方をしていることを知りました。それが驚きであり、新鮮でもあり、やる価値があると感じました。



「対話型」に違和感はありませんでした。参加者の言葉をうまく引き出してあげられるような問いをしたいと思っています。大人はプライドがありますが、そのプライドを傷つけずに素直な気持ちで作品と対峙させてあげたい。自然な切り口とはどのようなものか、常に考えています。話し手である私が「この作品、一見ゴミみたいですね？」とか言うことで、参加者に「そう思ってもいいんだ」というふうに感じてもらいたい。



そういう雰囲気作りは大切です。参加者が感じたままを言える雰囲気作りと、投げかけには工夫が必要です。



「対話型」は、先入観なく見る事ができて面白いです。私は絵の前で聞き手に徹するようにしています。それが結果的に対話型になっているんですよ。でも、作品が良いからこそ話が展開していくんですよ。

「所蔵品ガイド」は、どのような人が参加するかわからないし、参加者の美術の知識や経験などバックグラウンドも違う。それが所蔵品ガイドの難しさだと思いますが、いかがですか？



でも、その差があるから面白いと思っています。むしろその差をうまく利用しようと考えています。鑑賞作品についてよく知っている人も、他の方がどのように感じているのか知りたいわけですし。



私たちは調停役のようなものですね。



参加者でも作品に詳しい人、歴史に詳しい人、色々な方がいる。もっと、自分に知識があれば、参加者の意見をうまく拾えたのにとすることがあります。



話し手である私たちが、全てを知っている必要はないと思います。知っている参加者に聞くという展開もあってよいです。



聞き手を語り手にするということです。



知識は不必要なわけではなく、知識があることで深く鑑賞できることもある。また、参加者が考える材料にもらえることもある。  
所蔵品ガイドをやっていて思うことは、性別年齢に関係なく参加者の方々は感性が鋭い方が多いこと。その感性をうまく受けとめないといけないと思っています。



美術の知識があるとかないとか関係なく、本質を見抜く眼を持つ人はいますよね。



それは、作品の力なのかもしれない。



作品の前で語り合うことは良い経験。ガイドが終わって「自分ひとりで来たら絶対にこんなにじっくり見ることはなかったし、ほかの人の意見を聞くことはなかったと思う」という声をよく耳にしますよね。

### 「所蔵品ガイド」のテーマはどのように決めていますか？



日本画作品のように、その季節にあったものを優先的に選ぶことがあります。



東近美はコレクションが豊富なので、色々なテーマで組み立てられる。参加者へのプレゼントのような気持ちで、参加者をイメージしながら選びます。企画展も意識します。



私は1度トークしたものは、2度は取りあげないように心がけています。  
同じ作品を何度かやって、参加者の反応の違いを楽しむこともできるけれど、私はガイドのレパートリーを増やしたい。東近美は展示替えも多く、そういうことができる美術館なので。  
そうすれば、その日の参加者の好みにあわせ、ガイドの内容を途中で変えたりもできますから。



よくあります。あまりテーマをガチガチに作りこみすぎてしまうと、うまくいかないことが多い。



作品の知識を蓄えながらも、色々な角度から理解して、それをひとまず忘れて臨むということが大切です。参考図版などで二次資料を見せるより、とにかく目の前にある作品を見てもらいたい。

### 当館の所蔵品ガイドは、自分で作品とテーマを決め、ひとりでガイドするという特徴があります。



それが楽しいし、それが嬉しい。私たちに任せられているのでやりがいがある。



話を面白くすることに力を注ぐのではなく、できるだけ参加者を作品に近づけるように工夫しています。こちら側にひっぱるのではなく、背中をそっとおしてあげている感じです。

## 看視スタッフの声



所蔵品ガイドの案内放送が流れるとエントランスホールにお客様が集まってきます。そして、開始を待つ間、ガイドさんがお客様に声をかけている姿をよく目にします。初めての参加で緊張した面持ちのお客様もガイドさんの心遣いでいつの間にかこやかな雰囲気包まれます。帰り際、お客様から「今日のガイドはとても面白かったよ」と感想をいただくこともしばしば。そんな笑顔で帰って行くお客様を見送るのが私たちの日課です。

## 子どもとみる

子ども対象のガイドも担当する4名のガイドスタッフに語ってもらいました。



Aさん



Sさん



Tさん



Yさん

### 子どもの受入は、所蔵品ガイド開始後すぐに始まりました(2003年夏)。子ども対応を始めた動機や、続けている動機は？



子どもは美術なんてわからないんじゃないかなと誤解していた。子どものものの見方、考え方に感動し、意識が全く変わりました。子どもから得るものが多いですね。

### 大人とは違う？



大人は知識や既定概念で作品を見たり、理解しようとするけれど、子どもは目の前の作品だけを見る。



子どもがとにかく好きなので、子どもの対応をする機会があれば携わりたいと思っていました。ガイドスタッフとして活動する前から、地元の図書館で絵本の読み聞かせをしており、絵本と作品という違いがあるかもしれないけれど、「子どもには絵を見る力」があることを知っていました。子どもの発言はいつも鋭く、ドキッとさせられるし、面白い。子どもはストーリーを作るのが上手ですよ。時には発言がそのままストーリーになっていますよね。



私は子どもの頃から美術館や作品に触れる機会があり、それが大切だと感じていたので、子どもたちにもその機会を与えてあげたいと思っていました。先輩のガイドスタッフの子どもへのアプローチを見て、作品へのアプローチには枠がないことを知り、自分も色々な角度から子どもたちに作品を見せてあげたいと思っています。子どもの発言はいつも新鮮で、子どもたちに導かれてやっている感じです。



ガイドスタッフになった動機が、子どものガイドをしたいと思っていたからなんです。子どもは、見えたものから本質的なものをズバリあてることがあり、ときどき驚かされます。なぜ自分は、子どもが見ているように見えないのか。その経験が面白くて、子どもと一緒に見ることを続けています。

### 子どもたちにスクールプログラムを楽しんでもらうために、心がけていることは？



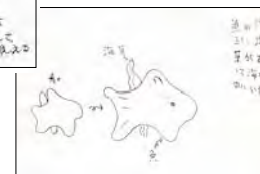
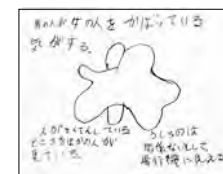
リラックスしてもらえる雰囲気作り。



子どもと同じ目線にたつこと。

### 註1 「ワーク」

ワークシート等を使った作業やアクティビティを「ワーク」と言っている。作品内容や子どもの学齢にあったワークを、ガイドスタッフ自身が考案することが多い。例えば抽象彫刻を〇〇に見えると小さな紙に書くワークを行うことで、発言の糸口につなげるなど。



こんな意見がありました(小学4、5年生)

「ダンスしているみたい」  
「男の人が女の人を支えている」  
「アルファベットのKとか、漢字の大」  
「人が棒をもってるみたい」  
「ヒトデ、星型みたい」

ハンス・アルプ《地中海群像》1941/65年



発言のない子どもにもアイコンタクトでコミュニケーションをとること。



余裕を持つことも大切。トーカーに余裕がないとうまく舵が取れないし、子どもたちの声を拾うことができない。

### 具体的に工夫していることは？



スクールプログラムでは、3作品のギャラリートークをしますが、メリハリをつけるために、1作品は「ワーク」<sup>(註1)</sup>を取り入れたトークにすることがあります。



私は、「もしもゲーム」<sup>(註2)</sup>という、もし作品の中に入ったらどんな匂いがして、どんな音が聞こえるのか、みんなで想像してもらおうワークをすることがあります。



作品のポーズを真似る<sup>(註3)</sup>こともあります。そうすることで、より作品を観察するんですね。



「サウンドマップ」<sup>(註4)</sup>といって、作品からどんな音が聞こえるのかなど、吹き出しの紙に書いてもらうこともあります。音というテーマをたてることで、大人が気付かないような細かいところまで見てくれます。



「ミッション形式」<sup>(註5)</sup>は心をつかみやすい。みんなが同じ目的にむかっていくというスタイルなので。



作品のタイトルを考えてもらうこともある。言葉にすることで、より記憶にのこることもある。



言葉にすることって大切ですね。目標は見て、感じて、話すことなんだけど、その手段としてタイトルや台詞を考えてもらったり。いずれも、ゲームだけに走っては本末転倒。



美術館に来た意味がなくなるものね。

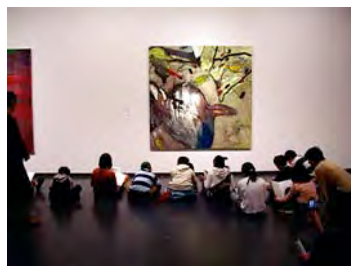


作品をよく見るための導入としてワークなどの展開をしている。  
鑑賞教材の「アートカード」<sup>(註6)</sup>は良いツールですね。スクールプログラム前にアートカードを使用してもらって、美術館に来た時に、実物とくらべて「大きい！」とか「色が違う！」とか複製とは違うということを感じてもらえる。

#### 註2 「もしもゲーム」

「もしも、あなたがこの絵の中に入ったら～」という「もしも」をキーワードに、絵の世界に入ったつもりで情景を想像し、言葉にしていけるゲームで、ガイドスタッフが考案した。

うすぐらく、  
足場が少ないところ  
(小学5年生)



野見山暁治《口うるさい風景》1999年

目が見られない  
ような砂あらし  
(小学5年生)

「もしも、この絵の中に  
風がふいていたら、どんな風だと思う？」

### 当館の子どもガイドの特色はなんだと思いますか？



大人のガイドと子どものガイドの担当者を分けることなく、どちらも対応すること。



教育普及研究員が学校と事前に綿密な打ち合わせをした結果をガイドスタッフに伝えてくれていることが良い。来館の目的に合わせて、ガイドスタッフが作品を選んだり、ガイドを組み立てられるのは、大変勉強になる。そして、振り返りの時間となる「反省会」では、他のガイドスタッフの工夫を知ることができて互いに刺激にもなり、まだまだ工夫の余地があることがわかり、面白い。



子どもガイドの時は特に入念に準備をするんです。子どもは大人が考えてもいなかった突拍子もないことを言う。色々な意見も拾いたいし、否定もしたくない。また、子どもに間違えたことを言うてはいけないという責任感もある。いつも真剣です。



だから子どもガイドはいつもドキドキします。



#### 註3 作品のポーズを真似る

安井曾太郎《金蓉》の人物像のポーズを真似ている様子（中学3年生）。真似てみると、実際には無理のあるポーズであることから、作家が大胆に構図を工夫したことがわかる。



#### 註4 「サウンドマップ」

小林古径《加賀鷹》から音を想像する様子。人間の声、火の音、いろいろと聞こえてくる。

#### 註5 「ミッション形式」

ギャラリートークの中で、指令（ミッション）を与え、謎をときながら作品を鑑賞していく方法で、ガイドスタッフが考案した。例えば、「絵の中に使われている色を探し出せ！」「気になる形を描いてみよ！」「絵の中のイメージをさぐれ！」などのミッションを出すことで、作品の中の色彩や形態に注目させる。

#### 註6 「アートカード」

遊びながら鑑賞の基本を身につけられる貸出用教材。国立美術館5館の所蔵作品のカードが65枚セットされており、「にたものつながりゲーム」や「名探偵ゲーム」などが楽しめる。



# ガイドスタッフの歩み 2002ー2011

2002

2003

2004

2005

2006

2007

2002年9月20日～11月1日  
1期生募集

2003年5月17日  
1期生登録(20名)

2004年6月26日  
他館ボランティア見学、交流会が始まる  
埼玉県立近代美術館を見学後、交流会を実施。

2005年1月20日  
他館ボランティア見学受入を開始  
(受入後交流会を実施すること)

2006年4月  
ガイドスタッフによる  
「ハイトツアー」スタート

2007年10月1日～11月25日  
3期生募集

2002年12月21日～  
2003年4月19日  
1期生養成研修

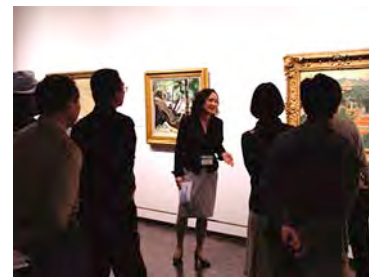
2003年5月23日  
所蔵品ガイドスタート  
毎日14時30分から約1時間。

ガイドスタッフルームの資料を  
有志で整える

2005年7月1日～8月31日  
2期生募集

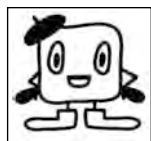
2006年4月  
「ガイドスタッフ文集2 感想文」

2007年7月24日  
トークラリー始まる



所蔵品ガイドの初回の参加者は10人。多い時は40人を超すこともあり、順調なスタートをきることができた。

2003年9月  
ガイドスタッフのキャラクター  
「モマたん」誕生



ガイドスタッフのマスコット。  
ガイドスタッフがデザインした。  
四角い顔は白いキャンパス、または  
モニターから連想されたもの。

2004年12月  
「ガイドスタッフ文集1  
一年半のガイドを振り返って」

ガイドスタッフの提案のもと、ガイドスタッフ  
内の交流のために、文集が作られた。

2003年11月15日  
フォローアップ研修が始まる

子どもたちが自由に  
発言している姿が楽しそうでした。  
(小3の保護者)

解説するのではなく、子どもに  
絵を見て感じる心を持つことを  
みちびいてくれる、とてもいい  
プログラムだと思いました。  
(小1、3の保護者)

あまり積極的に発言するタイプで  
はないので心配しておりましたが、楽しそうに鑑賞していてと  
ても良かったと思っております。  
(小1の保護者)

生徒の発する言葉をうまくく  
み上げて、感想を引き出して  
くださいました。  
(中学校教諭)

大勢のボランティアさんたちが  
笑顔で親切にわかりやすく説明  
してくださったので、引率して  
いだけで、生徒たちに深い美  
術体験をさせてやれた、と感謝  
しています。  
(中学校教諭)



## 子どもプログラムの歩み

ぎゅっ もまっと  
KIDS★MOMAT とは？



「KIDS★MOMAT」は、コレク  
ションの鑑賞と工作を組みあわ  
せた、子ども向けプログラムで  
す。有志のガイドスタッフが企  
画段階から参加し、材料を準備  
したり、リハーサルを重ねたり  
と、運営全般に関わります。ガ  
イドスタッフの結束力と意気込  
みを感じられるプログラムです。

KIDS★MOMAT 2003  
「夏休み! こども美術館」

8月8日・9日・10日(6回)  
小・中学生: 138名



抽象画を鑑賞した後、  
色紙を使って作品作り

KIDS★MOMAT 2004  
「春休み! こども美術館」

3月26日・27日・28日(6回)  
小・中学生: 43名

「夏休み! こども美術館」

7月31日・8月1日(4回) 小学生: 93名  
8月6日・7日・8日(6回) 中学生: 55名



版画作品を鑑賞し



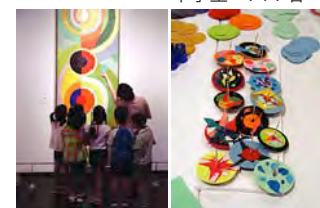
作品のお気に入り部分を  
切り抜いて、団扇作り

KIDS★MOMAT 2005  
「春休み! こども美術館」

3月26日・27日(4回)  
小・中学生: 128名

「夏休み! こども美術館」

8月6日・7日(4回) 小学生: 117名  
7月29日・8月2日・3日(6回) 中学生: 144名



低学年: 絵の中の色をみつけ →  
色とりどりのコマが完成

KIDS★MOMAT 2006  
「夏休み! こども美術館」

8月21日 小学生: 64名  
8月21日 中学生: 80名



中学年: 鑑賞でイメージを広げ →  
絵葉書を作り両親や友人へメッセージを書く

KIDS★MOMAT 2007  
「夏休み! こども美術館」

7月21日・22日(4回) 小学生: 115名  
7月24日(2回) 中学生: 180名



低学年: 描かれた生き物を鑑賞し →  
粘土などを用いて空想の生き物を制作

「夏休みトークラリー2007」  
(7月24日 中学生180名)

2008



2008年1月12日～4月19日  
3期生養成研修

2008年6月1日  
3期生登録（13名）

2008年7月12日  
ガイドスタッフが主催する「NOMOT会」発足



ガイドスタッフが企画・主催する年に1度の交流会。  
退会したガイドスタッフや職員、インターンも招待される。

フォローアップ研修  
株式会社クサカベ絵具工場見学（3月9日の様子）



子どもの目がきらきらして  
いてよかったです。  
（小4の保護者）

2009

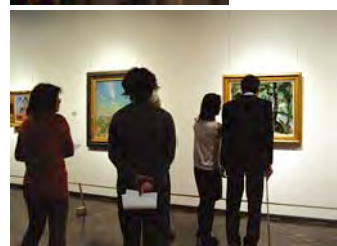
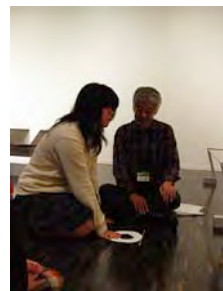


2009年2月～4月  
所蔵品ガイド日誌プログトライアル

2009年10月  
「ガイドスタッフ文集3  
それぞれの よしなしごとなど つれづれに」

2009年10月3日  
ガイドスタッフルームが学芸室の隣に移転される

2009年11月19日  
視覚障がい者の鑑賞サポート



都立文京盲学校からの視覚障がいのある高校生の見学  
依頼を受け、フォローアップ研修で視覚障がい者への  
「ことばによる」鑑賞サポートの方法を学ぶ。その成果  
を生かし、その後も視覚障がい者への鑑賞サポートを  
ガイドスタッフがやっている。

2010



2010年4月20日～  
所蔵品ガイドの日誌をブログ化する

2010年10月5日～12月12日  
4期生募集

フォローアップ研修  
ワールドカフェ「所蔵品ガイドをよりよくするために」（12月25日の様子）



普段のガイドで困っていることや、より良いガイドに近づくためにすべきことを、  
忌憚なく語り合う。

2010年3月29日  
企画展「小野竹喬展」こども鑑賞プログラム  
絵から感じる五七五（小学生20名）



作品鑑賞をしながら感じたイメージを  
五七五で表した。

2011



2011年2月5日～4月23日  
4期生養成研修

2011年3月12日～4月17日  
東日本大震災により、所蔵品ガイド休止

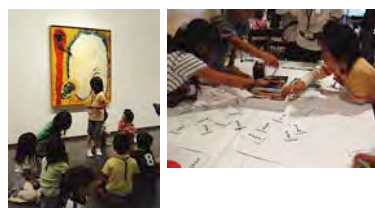
2011年7月15日  
4期生登録（10名）



美術に興味を与えてもらえる  
プログラムで、とても良かっ  
たと思います。  
（小4の保護者）

## KIDS★MOMAT 2008「夏休み! こども美術館」

8月23日・24日（4回）小学生：125名  
7月19日・20日（2回）中学生：235名



中学年：抽象画から感じた擬音語を発表 →  
擬音語カルタに挑戦  
「読み札」から想像した色や形から「絵札」を作成

「夏休みトークラリー 2008」  
（7月19日・20日 中学生235名）

## KIDS★MOMAT 2009「夏休み! こども美術館」

7月18日・19日（4回）小学生：136名



高学年：展示されている作品から好きな作品を選び、  
「マイ美術館」を作り発表

「夏休みトークラリー 2009」  
（8月20日・21日/2回 中学生281名）

## KIDS★MOMAT 2010「夏休み! こども美術館」

7月18日・19日（4回）小学1年生～小学4年生：141名



低学年：ハンス・アルプの版画作品を鑑賞 →  
アルプの作品に自由に描き足して、自分の「かたち」を作る

「夏休みトークラリー 2010」  
（8月5日・6日/2回 小学5年生～中学3年生215名）

## KIDS★MOMAT 2011「夏休み! こども美術館」

8月27日・28日 小学1年生～小学4年生：71名



作家によるフォトグラムのワークショップを  
ガイドスタッフが体験 →  
フォトグラムの作品鑑賞と制作を組み合わせた

「夏休みトークラリー 2011」  
（7月21日・22日/2回 小学5年生～中学3年生297名）

# ガイドスタッフが紹介された 掲載誌

## 雑誌・新聞・TV など

「東近美と来館者を結ぶ二十の架け橋」(安斉紀子・池端伸浩・井澤由利子・岩渕健二・大久保豪・妹尾喜久子・平野美沙子・弘中智子)、『DOME Vol.71』p20-26、日本文教出版株式会社、2003 年

「東京国立近代美術館の解説ボランティア」 一條彰子・白濱恵里子、『博物館研究 Vol.38 No.11』p24-28、日本博物館協会、2003 年

「作品解説ボランティア MOMAT ガイドスタッフ、活動を開始」 富山美智子・井澤由利子・弘中智子、『東京都博物館協議会 会報 No.89』、2003 年

「夏休み！こども美術館」 一條彰子、『現代の眼 542』、2003 年

「展覧会の鑑賞にギャラリートーク 学芸員、作家、ガイドが作品の見所を解説」、公明新聞、2004 年 10 月 3 日

「来館者とともに見る・考える—MOMAT ガイドスタッフによる所蔵品ガイド」 一條彰子・大久保豪・弘中智子・井澤由利子・池端伸浩・大内久美子・富山美智子・中嶋壽子・金成圭章、『現代の眼 544』、2004 年

「春休み！子ども美術館 小中学生向け所蔵品ガイド」 一條彰子、『現代の眼 546』、2004 年

「KIDS★MOMAT2004 年 東京国立近代美術館のなつやすみ」 一條彰子、『現代の眼 549』、2004 年

「春休み！こども美術館 く見る>を育む鑑賞プログラム」 白濱恵里子、『現代の眼 552』、2005 年

「KIDS★MOMAT2005 年 東京国立近代美術館のなつやすみ」 白濱恵里子、『現代の眼 555』、2005 年

「モダン・パラダイス展 夏休み！こども美術館」 白濱恵里子、『現代の眼 561』、2006 年

「東京の美術館をガイドとともに味わう」(林美佐子)、『東京生活 No.17』p128－129、エイ出版社、2006 年

「有名美術館 40 を探点」(大橋千鶴)、『おとなの週末 11 月号』、講談社、2007 年

「KIDS★MOMAT2007 年 東京国立近代美術館のなつやすみ」 藤田百合、『現代の眼 567』、2007 年

「趣味・特技を深める資格&検定入門—美術検定」(文屋信男)、『駱駝 6-7 月号』p120－p121、小学館、2008 年

「MOMAT ガイドスタッフによる所蔵品ガイド」(平野美沙子)、『JR 東日本 小さな旅 2008.10～2009.3』(パンフレット)、JR 東日本、2008 年

「KIDS★MOMAT2008 年 東京国立近代美術館のなつやすみ」 藤田百合、『現代の眼 573』、2008 年

「KIDS★MOMAT2008 年 東京国立近代美術館のなつやすみ」 藤田百合、『教育美術 797』、2008 年

「作品への理解が深まる作品解説サービス」(伊藤睦子)、『サライ 12 月号』、小学館、2009 年

「パネルディスカッション 1—何のために絵をみるのでしょうか」 一條彰子、『100 人で語る美術館の未来』p80－p83、慶應義塾大学出版会、2011 年

TV 「あなたが主役 50 ボイス—東京ミュージアムボイス」(金成圭章・妹尾喜久子)、2011 年 7 月 1 日、NHK

「本物で見る力養う対話型鑑賞教育—知識欲満たす大人向けも」(山本与志絵)、東京新聞、2011 年 9 月 19 日

「『夏休み！子ども美術館』—『鑑賞＋表現』プログラムの位置づけ」 一條彰子、『現代の眼 591』、2011 年

＊（ ）は取材協力者、（ ）のない人名は執筆者

## 編集後記

ガイドスタッフの活動も 10 年目を迎えようとしています。この間のガイドスタッフと関係者の皆様のご尽力に深く感謝いたします。当館の教育普及活動の多くは、ガイドスタッフの協力なくしては成り立ちません。教育普及室とガイドスタッフは、お願いする、されるという関係をこえ、共にプログラムをつくり上げていく同士として活動していたことも多いように思います。私の役割は「美術館とガイドスタッフのつなぎ手」でしたが、ガイドスタッフから教えられ、そして支えられていたことばかりでした。本記録集には、ガイドスタッフの 9 年間の活動がぎっしりと詰まっています。美術館・博物館ボランティア事業に携わる多くの方々に、本記録集がボランティア活動を考えるうえで、ささやかな一助となれば大きな喜びです。また、ガイドスタッフのこれまでの活動内容を見つめ直し、これからの新しい展開にむけて本記録集が役立つことを願っています。

(藤田百合)

## 東京国立近代美術館教育普及室スタッフ

一條彰子 (1999 年～ )  
蔵屋美香 (2001 年～ 2002 年)  
白濱恵里子 (1998 年～ 2007 年)  
荒木和 (2002 年～ 2010 年)  
藤田百合 (2007 年～ 2012 年)  
細谷美宇 (2012 年～ )

東京国立近代美術館解説ボランティア  
MOMAT ガイドスタッフ活動の記録 2002—2011  
トーキング・トーキンビ

2012 年 3 月発行

編集：一條彰子・藤田百合・細谷美宇（東京国立近代美術館）

デザイン：高橋美礼

イラスト：平澤一平

印刷：アドヴァンス

発行：東京国立近代美術館  
東京都千代田区北の丸公園 3-1 〒102-8322  
Tel. 03-3214-2561 Fax. 03-3214-2576